
平成23年7月24日(日)

第四一七回 史跡めぐり 資料

夏の湘南・鎌倉の海と史跡

NPO法人 越谷市郷土研究会

越谷市 郷土 研究会

第417回史跡めぐり

夏の湘南・鎌倉の海と史跡

平成23年7月24日(日)

- 大巧寺
- 日蓮辻説法跡
- 蛭子神社
- 本覚寺 夷堂橋
- 妙本寺
- ぼたもち寺 (常栄寺)
- 本興寺 逆川橋 乱橋
- 辻ノ薬師堂
- 元八幡
- 0. 妙長寺
- 1. 九品寺
- 2. 材木座海岸
- 3. 光明寺
- 4. 補陀落寺
- 5. 実相寺
- 6. 五所神社
- 7. 来迎寺
- 8. 長勝寺 獅子井 日蓮辻
- 9. 安国論寺
- 10. 妙法寺
- 11. 安養院
- 12. 別願寺
- 13. 八雲神社
- 14. 小町通り散策

参加費 4,500円

ご案内 会長 宮川 進



大巧寺

駅前の若宮大路の交差点の向いに見える赤い門の寺が大巧寺です。山号は長慶山正覚院大行寺と
いって、昔は十二所にあつて源頼朝の祈願所の一
つでした。赤い門は將軍家ゆかりのしるしです。
あるとき頼朝がこの寺で軍議を開いて大勝したの
で大巧寺と改めたと『風土記稿』にあります。の
ち住僧が日蓮上人に帰依して改宗。日証上人が開
山となつて比企ヶ谷の妙本寺の院家となり、元応
二年（一三二〇）さきの十二所からこの小町に移
しました。またこの大巧寺は通称「おんめさま」
といつて安産のお守りで有名です。

むかし、五世の日蓮上人が妙本寺にゆかれた
帰途、夷堂橋のところで産女の亡霊に逢われまし
た。その産女は難産の苦言地獄からいまだまぬが
れることができないでいると申します。上人はそ
れを哀れと思ひ、回向してその苦患をのぞかれま
すと、女はたいそう喜んで一包みの沙金を捧げて
厚く御礼を申しのべました。上人は、その沙金で

宝塔を造り、産女の霊を手厚く祀りました。爾
来、この産女さまにお参りしてお札をいただく
必ず安産するといひます。①

本日の行程（予定）

<ゆき>

南越谷 8:16 乗車～南浦和 8:28 着 南浦和 8:35 乗車～

東京 9:16 着 東京 9:21 乗車～戸塚 9:57 着 戸塚 9:57 乗車

～鎌倉 10:09 着

<帰り>

鎌倉 16:40 乗車～池袋 17:45 着 池袋 17:48 乗車～

武蔵浦和 18:08 着 武蔵浦和 18:13 乗車～南越谷 18:27 着

●小町

二階堂・淨明寺・十二所の大塚郷が源氏ゆかりの地というならば、小町・大町・材木座はまた日蓮上人のゆかりの地ともいふべきでしょう。

安房から渡って来て狂人坊主とののしられた日蓮坊が、始めて雨露をしのいだのが名越の松葉ヶ谷でした。その法華宗開教のデモンストレーションを行ったところが小町の辻です。

坂本日喜の『凡下勅』を読んでいたら、小町・比企・名越・乱橋は「日蓮の里」と書いてありました。つまりこの小町・大町は日蓮上人を無にしたりは語れません。建長五年（一二五二）安房国（千葉県）から三浦の米が浜（横須賀）に小さな舟が一せき着き、一人の青年僧がそこにおりました。その衣服はまことに簡素でしたが、眼は美しく澄み、唇の引きしまった好感のもてる青年でした。

鎌倉時代は、大町や小町は町屋とってたいていへんなにぎわいであったことは、『吾妻鏡』や『絵

草紙』など開くとよくわかります。そのなかで特ににぎわったところが小町の辻でした。

日蓮辻説法跡

安房から渡って来た、さきの日蓮は、この辻に立って毎日、「煩惱菩提・生死即涅槃」「南無妙法蓮華経」と唱え、つまり恋人どうしが会うときも「南無妙法蓮華経」ところ唱えなさい、人生のいろいろな悩みや、執着は、そのまま悟りだと思いなさい、法華経を信ずることは、武士にあつても「罪業を捨てずして仏道を成じます。成仏とは自分をよく知ることだ」と説いて「法華宗」つまり日蓮開教のデモンストレーションを行いました。

いわばこの日蓮辻説法の跡、小町の辻は日蓮開教の第一のメッカといふべきところでは、雨の日も風の日も、この辻に現われて「政治が正しくなければ国も庶民の生活も安んずることできませんぬ」また「為政者が、邪法を信じ、正

しい法華経をないがしろにすれば『自界叛逆・他国侵逼難』となつて日本は滅亡する」と予言しました。ときに日蓮は三十八歳でした。

日蓮が、この辻に現われたころは、日本国内いたるところ、天変地変が相ついで起つていました。風水害に痛めつけられたとおもうと疫病がまゐんえんし、地震が起り大火に追われ、田畑はかんばつに見舞われて、京都では、火つけ強盗、追いはぎ、劫火が町をなめつくしました。世はまさに飢饉地獄でした。

当時の仏教は、公家方か武家方について、庶民大衆が今日の糧にも迷うなかを僧たちは豪奢な生活にひたっていました。「脱貴族仏教」を唱えた日蓮は、それらの天変地災に苦しむ庶民大衆の心の飢えをみたしてゆきました。

日蓮の胸中には憂国の至情、名もなき大衆への愛情がたぎり立っていたのです。

そして「安房から来た狂い坊主よ——」とののしって、日蓮に石つぶてをなげつけたこれら大衆も、いつしか日蓮の膝下にひざまずいて、口々に

「南無妙法蓮華経」と合唱をはじめました。日蓮は、絶対的な平和主義者でした。また無抵抗主義者で、たいへんな教養をもった学研者で情熱的な実践者でした。②

●大町

日朝さまの前の夷堂橋を渡ると大町です。『風土記稿』を見ますと、大町は商売が多少をもつて夷堂橋を境とし、以北を小町、以前を大町としたとあります。この大町も小町と同じく日蓮宗の寺院が多いところでは、

夷堂橋を渡ると左がわに題目と「妙本寺」と書いた大きな三表が建っています。またその参道の彼方に総門が見えます。この長い広い参道のある左右前後の地が『十六夜日記』にもある比企ヶ谷です。阿仏尼の歌に、

忍びねはひきのやつなるほととぎす雲のたかくいつかなのらむ

があります。

本覚寺

鎌倉を出て、郵便局の横の道をのぼったところに妙巖山本覚寺があります。町の人々は通称「日朝さま」と、親しみをこめてこう呼んでいます。

大町の人も小町の人も、この日朝さまの境内を朝夕に通り過ぎて行きます。そして百日紅さるすべりの美しい花を仰いで「ああ夏だなア」といって行きます。まちの人々は、この寺がなんとなく好きのようです。

この日朝さまは、別に東身延ひがしみのぶといわれています。文永十一年（一二七四）、日蓮上人が配流をゆるされて佐渡から帰って来て滞在した旧跡と伝えられ、上人自筆の「消息文」などが寺宝としてあります。開山は日出上人。日朝上人は第二世です。本堂わきに祖師日蓮上人の分骨堂があり、これが別称東身延の名を由来します。

この本覚寺を日朝さまと呼ぶゆえんは、この本堂に安置されている上人の木像にまつわる話によ

ります。日朝上人は永い間眼をわずらい苦しみました。のち、ぜひ眼の不自由な人のためになりたといいつて寂されました。以来日朝さまの木像に願をかけるとよく眼病が治癒したといわれます。



本覚寺夷堂

中央には本堂があり、北朝期の釈迦三尊像や日蓮上人像・日朝像が安置されている。本堂のわきに祖師日蓮の分骨堂があり、本堂の前方には鐘楼・夷堂・仁王門が並んでいる。鐘楼の梵鐘は日蓮上人が上総木更津の八幡宮

の論争に勝ってもちかえたもので、「応永17（1410）年」の銘記されている。墓地には刀工岡崎五郎正宗の墓といわれるものがある。現在の夷堂は最近復興された建物で、鎌倉・江ノ島七福神の一つに数えられる古い夷神を祀っている。

④

この場所は鎌倉時代幕府の守護神として祀られていた夷堂えいどうがあったところで、日蓮が佐渡の配所から鎌倉にもどったと

刀匠岡崎五郎正宗

本覚寺には岡崎五郎入道正宗の墓があります。

正宗は、貞応（一二二二—一二三三）の頃に生れた刀工です。父は相模の刀匠藤三郎行光といい、五郎は稚おさなくて母を失ない継母によって育ちました。

五郎はその母が病にかかったとき、雪の夜ひそかに水垢離みよこりを取って「お母さまの病が一日も早く治りますように」祈ったと『日本刀工伝』にあります。

やがて五郎は成人して、当時の名匠とうたわれた新藤五国光に弟子入って刀法を学び、その後、諸国を回国修業して相州刀を完成しました。また正宗は日蓮に帰依してその精神を刀法の上にあらわしました。

正宗はよく弟子たちに、太刀は人を斬るものではない、太刀は天下を治め、国を鎮め、人の心を正しく導くものだと言いました。正宗の幾人かの弟子たちはよくそれをまもったと『刀工伝』にあります。

五郎正宗の門下には、貞宗・村正ら正門十哲と呼ばれる名工を輩出しました。

また佐介ヶ谷の入り口付近には俗に正宗屋敷といわれるところと、正宗がその水で刀を鍛えたと称する「正宗の井」があります。

存在が明らかになるのは鎌倉後期に入ってからで、新藤五国光の出現による。こ



の国光は、京都粟田口から鎌倉へ移住した国綱の子といわれ、短刀を最も得意としたといわれる。作刀は永仁元年（一二三三）から始まるといわれる。

妙本寺

開基は比企大弐三郎能本、開山は千葉平氏出自の日朗上人です。ここは二代將軍源頼家の夫人であつた若狭局わかさのつぼねの父、比企能員の屋敷あとでした。

二代將軍頼家は、北条の尊横をいたくにくみましたが、かえつて北条一族の術策におもて能員は名越に招かれて謀殺され、頼家の長子一幡は母とともにこの家において北条の軍兵のために焼討ちされ、その兵火の中であわれな最後をとげたところ
です。

いま石段をのほり山門を入ると右手に一幡の小さな墓があります。人々は「一幡の袖塚」と呼んで、いまも四季おりおりの花や香を手向けています。成人すれば当然に將軍となるべき一幡でしたが、その芽をばむざんに摘ませたのが祖母の政子でした。その父の頼家を伊豆に幽閉したのも政子でした。頼家はそこで鎌倉からおくられた刺客のために、風呂に入ったところを殺されました。

いだ三代將軍実朝も没すると、頼家の娘の竹ノ御所嬢子が、四代將軍藤原頼経の夫人となつてここに住みました。

その頃、能員の末子の大弐三郎能本は、順徳上皇に仕えて佐渡に配されていましたが、やがて嬢子のはからいで鎌倉に呼ばれて武蔵の国にある父の旧領を安堵されました。のち能本は日蓮上人に帰依し、その弟子となり、師の日蓮のために一族所縁のこの地に一寺を建てて長興山妙本寺と名づけました。

長興は、北条時政のために名越の北条館で謀殺された父能員の法号、妙本は、むざんにもこの比企ヶ谷の屋敷で姉若狭や、甥の一幡とともに北条氏によつて焼きころされた母の法名でした。

『吾妻鏡』はこのときの経緯をこう書いている。一二〇三（建仁三）年八月二十七日、將軍頼家が、いよいよ危篤に陥ったので、相続のことが相談され、関東二十八カ国の地頭職とくしきと惣守護職そうしゅてしきを一万に、關西三十八カ国の地頭職を一万に譲ることになった。ところが一万の外祖父比企能員はこれに不満を持ち、千万およびその外戚である北条氏を亡きものにしようとして、兵を集めはじめた。かくて鎌倉には双方に味方する武士が群れ、騒然たる状態になって来た。

九月一日、頼家の病床につきそっていた若狭局が、頼家に訴えた。

「このままでは北条にやられてしまいます。一万の行末が心許のうございませす」

頼家は驚いて比企能員を招き、ひそかに北条討滅の計画を練った。ところが、この密談を母の政子が障子を隔てて聞きつけてしまった。政子は手紙を認め、侍女を走らせて、時政に急を告げる。折ふし御所を出て、名越なごえにある本邸に帰る途中だった時政は、手紙を見て思案の末、大江広元の邸に寄って相談する。

が、広元の答は慎重だった。

「故將軍家の時以来、御政道の事については御助け申し上げて来ましたが、戦さの事は何とも……。ま、あなたの御判断でなさることですな」

ていよく逃げをうったのである。時政はまだ決心がつかない。広元の邸を出たものの、まだ馬上で思い悩んでいたが、とうとう従っていた天野蓮景と新田忠常に計画を打明けた。

「やりましょう！」

二人は即座に答えた。

「なあと、能員ごときを討つのに、軍兵を動かす必要はありませんよ」

名越の邸に戻って、秘策が練られた。大江広元も迎えをうけて出かけてゆく。先刻態度を鮮明にしなかったので、広元の所から比企側に情報が漏れはしないかと警戒し、口止めする意味で呼びよせられたものと思われる。慌しい動きがあった後、使が比企能員の許にさしむけられた。

「將軍家の御病氣平癒祈願のため、薬師仏供養を行います。なにとぞ御来臨下されたい」
能員の息子たちは警戒して行くのを止めたという。

「どうしても行かれるなら、相応の武装をし、家子郎従を従えてゆくべきです」

が、能員はそれを聴かず、武具もつけず、仏事にふさわしい礼装をし、数人の供だけ連れて出かけていった。能員が北条邸に入るやいなや、物蔭にかくれていた天野蓮景と新田忠常は、やにわに彼の両手をむすどと掴み、竹藪に引入れて、刺殺してしまった……。

このところの『吾妻鏡』の描写には息づまるようなものがあるが、中でもこの部分は、
「誅戮踵ヲ廻ラサズ」

とこれ以上簡潔にはできない書き方でその一瞬を表現している。漢文の持つ迫力であろう（もつともこれには古典に似たような表現があるので手放しに感心もできないが）。

能員の非業の死を知った従者は宙を飛んで比企の館に急を告げる。と、時をおかず、「尼御台所の仰せ」をふりかざして、北条時政の子、義時ほか北条一族、小山、三浦、畠山らが攻めこんで来た。不意を衝かれた比企方の劣勢は蔽うべくもないが、それでも彼らは勇敢に戦い、攻め手にかかりの痛手を負わせた。戦闘は午後二時から四時頃までおよんだという。敗色の濃くなつて来たとき館に火が放たれた。その中で比企の息子たち、娘の婿たちも自殺し、若狭局も一万も炎の中に死んでいった。

文学の中の妙本寺

また鎌倉ではこの妙本寺ほど、詩や歌や、創作に取り

入れられたところは他にはないといえます。国木

田独歩は「妙本寺懐古」を作りました。佐佐木信

綱は「仙覚律師」を書きました。また先に物故さ

れた作家の小林秀雄と詩人の中原中也もこの妙本

寺の庭を愛しました。小林は「中原中也の想い

出」のなかで、中也と長谷川泰子という女性を中

に争って恋に敗れた中也とこの妙本寺に来て、二

人は、寺のきざはしに海棠かいどうの花の散るのを黙って

見ているところがあります。中也はその後こころ

を狂わせ、病にさいなまれて没しました。また京

洋一と称されたその海棠の木も、中也の死を悼む

ようにいくばくもなくして枯れました。

そのほかに泉鏡花・高山樗牛や、久米正雄・菊

池寛・高浜虚子・蒲原有明・福田正夫・高村光太

郎・松本たかし・吉野秀雄・大仏次郎などが多く

の作品をのこしました。

仙覚と万葉

仙覚は万葉集の研究者として有名な人です。將軍頼経の師の親行の

もとで万葉集を見て、その研究に志したのが寛元

三年（一二四五）四十三歳のときでした。まず師

の「河内本万葉集」を底本として他の証本をもつ

て校訂しました。建長五年（一二五三）十二月、

仙覚は寛元四年に抄出して新点を加えたものを奏

覧状と共に師のすいせんによって後嵯峨上皇に献

上しました。ときに仙覚五十一歳でした。

上皇は、この新訓を賞されて御製一首を仙覚に

賜ります。その仙覚の『万葉註釈』が完成したの

が文永六年（一二六九）の春でした。その奥書に

「文永六年三月於武蔵国比企郡麻師さしう郷書写政所

之畢仙覚在判」と見えます。仙覚はその三年のの

ち、文永九年（一二七二）の六月にさきの麻師宇

（埼玉県小川町）に没しました。

常栄寺

妙本寺の総門の横を右に入ると、常栄寺の前に出ます。その前をさらに進むと八雲神社から横須賀・三浦街道に出ます。常栄寺は通称「ぼたもち寺」といわれます。その由来は、ここに住んでいた^{さじきに}棧敷尼という老女が、日蓮上人が籠ノ口の刑場に引かれて行くとき、「ぼたもち」を作って供養したところからそう呼ばれると野史に見えます。

この棧敷尼は、和田一族の兵衛左衛門尉という人の妻でした。この地は、かつて源頼朝が浜見のためにやぐらを組んだところといわれて、いつしか棧敷屋敷と呼ばれ、つまり棧敷尼は棧敷屋敷の尼という意味なのです。

慶長十二年（一六〇七）妙本寺十四世の日詔上人が一寺を建てて尼の法名にちなんで東雲山常栄寺としました。また中興の開山を慶雲院日祐といえます。日祐尼の父水野淡路守忠良は紀伊国（和歌山県）は新宮の城主で、三万五千石を食封とし

魚町橋から一〇〇^⑧先、左側のすつくと伸びたイチョウの木の下には、日蓮宗法華山本興寺がある。創建は一三四年で、開山は天目とも日什とも伝えられる。門前には日蓮聖人辻説法跡の碑が見える。

本興寺の先で道は高くなり、横須賀線の三浦道踏切にさしかかるが、そのすぐ手前右側に、辻ノ薬師堂と呼ばれる小堂がある。七二五^⑧年ごろ由比の長者染屋時忠は、真言宗医王山長善寺を建てた。その後寺は薬師堂だけを残して焼失し、いつのころかここに移されたという。電車が通るたび激しく揺れる堂内には平安時代作の薬師三尊と鎌倉時代作の十二神将が並び祭られている。

⑧

妙長寺の前の道の手前には、鎌倉十橋の一つ乱橋みだればしがあり、その橋をわたってさらに北へすすんだ左側の細い道の奥にこじんまりとした社の元八幡つしや（国史跡）がある。この社は、源頼義が前九年の役（1051～62年）で奥州の安倍頼時・貞任父子を討って京へ帰る途中の1063（康平6）年に鎌倉に立ち寄り、由比郷鶴岡のこの地に京都の石清水八幡宮の祭神を勧請してつくられたといわれている。頼義の子義家は後三年の役（1083～87年）で奥州へ行く途中の1081（永保元）年に参詣して社殿を修理し、源氏の氏神として尊崇

したという。鎌倉に居を定めた源頼朝が1180（治承4）年に現在の八幡宮の小林郷北山に社殿を移してから、元八幡と呼ぶようになったが、正しくは由比若宮である。この社にくる途中に石清水の井と呼ばれる井戸があって、石清水八幡宮とのつながりを伝えている。

⑨



元八幡（由比若宮）

妙長寺と泉鏡花

海潮山妙長寺は、初め材木座の沼浦に日実上人によって、日蓮が伊豆に配流の船出の霊場として開かれました。のち元和元年（一六一五）に津波の被害をうけて現在地に移されました。

山門を入ると「日蓮聖人伊豆法難記念」と彫った大きな相輪の塔が建っています。この石柱は関東大震災のとき倒れた鶴岡八幡宮の第二の大鳥居の一部で「寛文八年八月十五日御再興」の銘があります。本尊は祖師日蓮と三三三菩薩です。また寺内開山の日実・日朗などの坐像が置かれています。

明治二十三年、北陸英和学校を中退して小説家にあこがれて金沢から出てきた泉鏡花が、一夏をすごしてその処女作「冠弥左衛門」を書き上げました。これは明治十一年に平塚在に起きた「真土しんど村松木事件」を主材にしたものです。

九品寺

先年、この九品寺くはんじの近くから鎌倉の頃のたくさ
んの人々の遺骨が出土しました。男も女も幼児ま
でが頭を刃で打ち割られていました。

『太平記』に「浜面の在家、ならびに稲瀬川の東
西に火を懸けたれば、をりふし浜風はげしく吹き
ひて車輪の如くなる災し黒煙りの中に飛びちっ
て、十町二十町が外に燃えつくこと同時に二十余
ヶ所なり。猛火の下より源氏（新田）の兵乱入り
て——煙に迷へる女、宣べとも追ひ立てられて火
の中、堀の底ともいはず逃げ倒れたるありさま
——語るに言葉も更になく聞くに哀れを催して皆
なみだにぞ咽なげびける」とあります。

義貞は建武三年（一二三三六）、ここに一寺を建
て自から「内裏山九品寺」の額を書きました。開
山は紀主念阿。本尊は弥陀三尊。寺内に永仁四年
（一二九六）の銘のある「石薬師」があります。

⑪

辻の薬師の踏切りを越えると、そこから南が材
木座です。この材木座大路に入ると、つーんと汐
の香が流れてきて、「いよいよ鎌倉の海浜」と行
人の旅心になんともいえない旅愁を誘います。

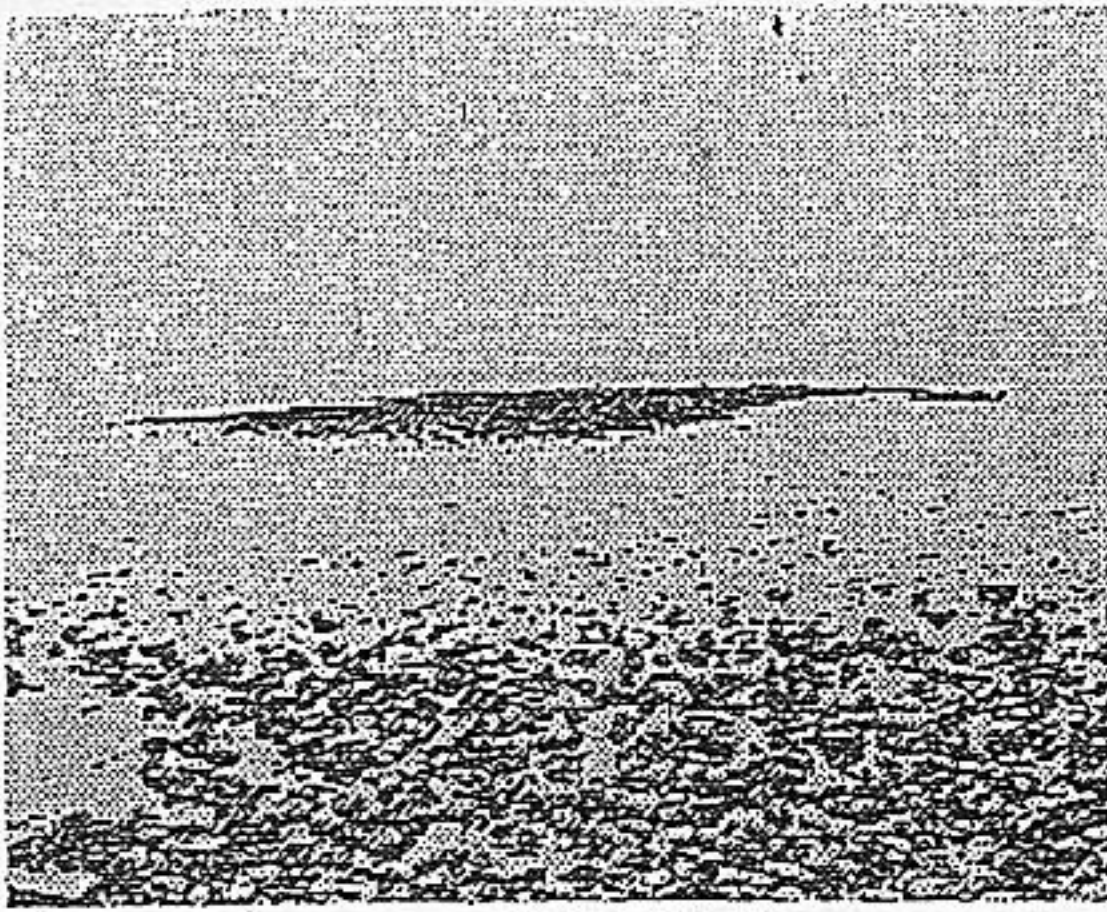
むかし、ここに紀州や尾張の材木が運ばれてき
て市が立ちました。その頃の材木座は、小坪・三
浦街道に面して、酒屋・豆腐屋・雑貨屋その他が
いりまじった、寺ばかり多い漁村という感じてし
た。

はじめて、ここに別荘を建てたのは吉井勇の祖
父友実でした。吉井別荘ができる、追いおい京
京から人々が材木座に移って来ました。

またこの材木座の海は、永いあいだいろんな喜
びや悲しみを歴史のなかに眺めてきました。源頼
朝は義経の愛人静の生んだ嬰兒をこの海に頭をひ
ねって捨てさせます。将軍頼家は、この海岸で武
技の会を開いたが、間もなく修善寺に送られて非
業な死をとげました。和田義盛も北条のためには
かられて、ついに滑川で敗死しました。

和賀江島

『東関紀行』には「和賀江の築島」とあります。た江戸時代の俳諧帳に「和歌絵島」と見えま。その和賀江島は、貞永元年（一一三二）の七、往阿という僧が北条泰時にたのまれて築いたのです。



和賀江島（鎌倉市材木座）

往阿弥陀仏についても、人となり事績などは未詳である。当時、社会事業などに活躍した念仏僧と思われるが、筑前国（福岡県）宗像神社にのこる記録によると、和賀江島をつくる前年の寛喜三年（一一三二）四月、同国新宮浜の鐘ヶ崎に防波堤を構築しているので、全国のしかるべき町を訪ねては、同様の事業を企図し、これを助けていた人物とみられる。

しかし、往阿弥陀仏の努力にもかかわらず、大風や激浪があるたびに多くの舟船が難破したようで、仁治二年（一二四一）四月には大地震と南の強風で十艘ほどが破損し、弘長三年（一二六三）八月には大風のため、二度にわたって舟船が破損または漂没し、多くの人びとが溺死した。

それでも、鎌倉の町の繁栄よりは由比が浜に集まる舟船の数によくあらわれていた。浜は、とくに鎌倉時代に重要な役割をにない、鎌倉の海の玄関口として、あらゆる物資はもちろん、有能な人材をも迎え入れたことであろう。かつて、材木座海岸から中国宋の青磁の破片類を数

との交易があり、大陸の新しい文物・文化が直輸入されたことを物語るのである。

元弘三年（一一三三）に鎌倉幕府が滅亡したのちも、島は足利氏によって保護され、極楽寺が管理にあたって和賀江島の修築を行なっている。江戸時代には島の帰属をめぐる小坪と材木座両村が争い、島の石積を切り開くということもあつた。

現在、満潮になると、島姿は水面下に没してしまいが、この貴重な遺跡を、永遠に海底に沈めるようなことがあつてはならない。

和賀江島築港以前にも船舶の寄港地としてにぎわい、商業の町がつくられていた。また鎌倉の建築資材の集散地として材木商人が住み、鎌倉後期には座が形成されていた。この材木座が地名として残り、現在でも町名として使われている。

光明寺

光明寺は桜の花の美しい寺です。鎌倉駅から京浜バスに乗って十分余りで行かれます。浄土宗関東十八檀林筆頭で、天照山蓮華院光明寺といいますが。

寛元元年（一二四三）記主然阿良忠上人を開山として執権北条経時が創建した寺です。もとは蓮華寺といって小坂郷の佐介ヶ谷にありました。のち経時が靈夢を見てここに移して寺号を光明寺と改めたといわれます。

光明寺の巨大な山門を入ると、本堂と庫裡とのあいだに美しい庭園が見えます。この庭園は記主然阿良忠が裏山から水を引き、池を造られたので「記主庭園」と伝えます。またのちの人が庭園をつくって開山の名にちなんでつけたともいわれています。この記主庭園は、瑞泉寺の庭園と共に鎌倉第一の名園というべきでしょう。

この名園を愛してよく文人墨客がおとずれて歌

会・句会などを開きました。また、夏に入ると庭園に美しい蓮の花が開きます。蓮は大賀博士が発見された二千年前の種子から生まれた蓮です。

本堂を右に廻ると、みごとな石庭が造られています。御堂の縁に腰をおろして、庭に向ってまぶたをとじていますと、自然と心が澄み透ってくる思いがし、石の庭は不思議な作用をかもします。

昭和二十年、日本の敗戦のために人々の心がたいへんに荒廃をして自信を失ったとき、光明寺と鎌倉の文化人によって「鎌倉アカデミー」がここに設立されました。それはいろいろな理由で永くはつづきませんでした。何かに飢え渴していた人々の心を救いました。「江分利満氏の優雅な生活」で直木賞を受賞した山口瞳もここに学んだ一人です。

光明寺は、こうした終戦後の文化の発生の源で

した。また光明寺には多くの名宝、国宝の「当麻曼茶羅縁起絵巻」二巻をはじめ、「浄祖五祖絵巻」「光明大師絵詞」「当麻曼茶羅図」などの重要文化財、その他が数多くあります。また蓮乗院の内陣には月岡栄貴画伯ほか数名に成る格天井があります。

光明寺の庭を拝観して、寺後の丘にのぼると、開基北条経時の墓、開山良忠上人、また歴代住職の墓がならびます。また狂騒の詩人といわれた洋画家、長谷川利行の名作「冬の墓のある風景」はここを素材したといえます。

その後、徳川家康は光明寺を関東大檀林（浄土宗の学問所）の筆頭と定めた。また、日向延岡藩主内藤氏の菩提寺ともなり、寺は繁栄を続けた。

二九基の巨

大な宝篋印塔を取

り巻く石塔群は見

事で目を見張らせ

補陀洛寺の前の道をすすむとバス通りにでて、海岸に沿って小坪方面にむかって行けば光明寺（浄土宗）がある。開基は北条^{つねとき}経時、開山は法然上人の孫弟子然阿良^{ねんありやうちゆう}忠^{ましのぶ}（記主禅師）である。この寺の前身は経時が、鎌倉に入って浄土宗の布教に努めていた良忠のために1240（仁治元）年^{まじげ}佐助ヶ谷^{さすけがや}に建てた蓮華寺である。1243（寛元元）年に蓮華寺を現在地に移して寺名を光明寺と改めたといわれる。



光明寺当麻曼茶羅縁起絵巻（部分）（国宝）、

補陀洛寺

この浜辺の街にもう一つ寺があります。材木座の海からあがって高屋酒店と伊勢屋菓子店の間の道を入ると、南向山帰命院補陀洛寺ふたたくという古義真言の寺です。

開山は謡曲「恋塚」の主人公、友人の渡辺巨の妻の袈裟を斬って仏門に入った荒法師高尾文覚です。開基は源頼朝。養和元年（一一八一）文覚は鎌倉に来てはじめてこの寺を持ちました。本尊は十一面観音です。『風土記稿』には不動明王。『鎌倉志』には薬師如来を本尊としています。

はじめ、補陀洛寺は七堂伽藍に輝いた寺で、大旦那は北面の武士の遠藤武者左衛門尉為盛でした。
⑭

実相寺

実相寺は、曾我物語の敵役工藤左衛門祐経の屋敷跡に外孫の弁阿闍梨日昭が開いた寺です。日蓮は、ここが海に近いので「浜殿はまどの」と呼んだといいます。

実相寺はいまは伊豆玉沢（三島市）の妙法華寺の末寺ですが、その妙法華寺は文保元年（一一三一七）大成弁日昭が、八十一歳のときこの地に開堂した寺です。

のち元弘二年（一一三三）に新田義貞が上野に兵を起して鎌倉に討ち入ったとき、新田軍は頼朝以来繁栄をきわめた鎌倉を浜風を利用して焼き払います。このとき新田軍は、女子供老人といわず暴虐のかぎりをつくしました。妙法華寺はそのときの兵災に焼かれて伊豆国金村に移りました。のち、日昭の弟子日祐の弟日英が、この浜殿の旧址を惜しんで一寺を再建して法華弘通の道場としました。

五所神社

五所神社は材木座の総鎮守です。明治四十一年、乱橋材木座村が大町と合併されて東鎌倉村となったとき、乱橋の三島神社、材木座の諏訪神社と見目（視女）神社、琴比羅宮と八雲神社を合せて五所神社と改めました。またこの神社には大日如来の種子を彫った重要美術品、弘長二年（一二六二）十一月廿二日銘文の板碑と摩利支天の石仏があります。

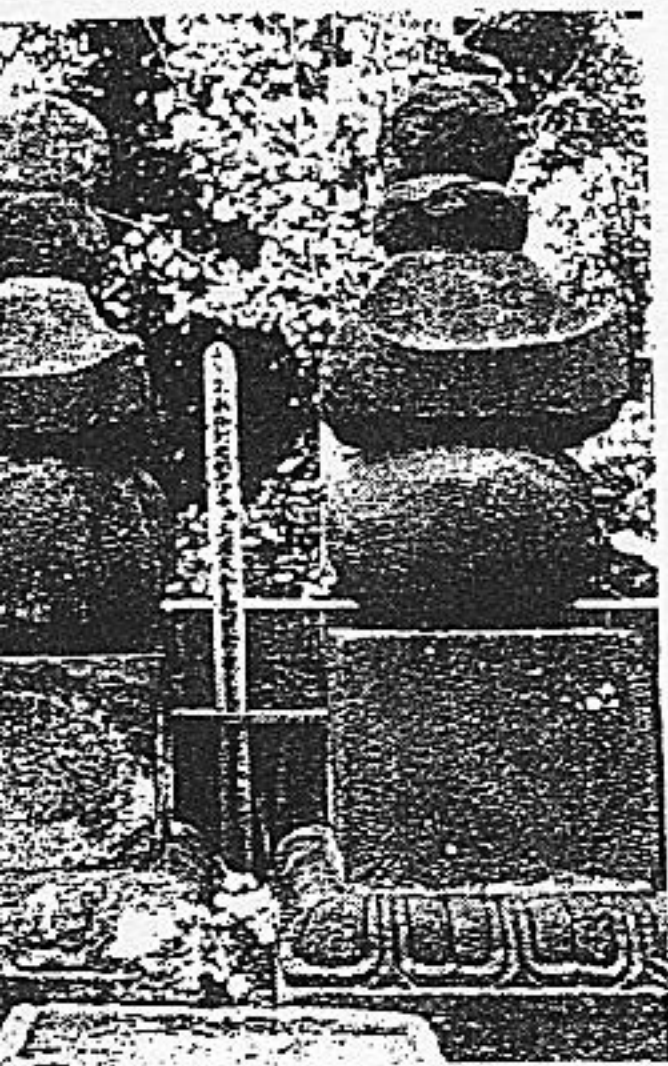
七月七日の例祭には、寛永十九年（一六四二）修造としるしたけんらんたる神輿が街を練り、大變なにぎわいをみせて若い娘たちの胸をときめかせます。

⑬

来迎寺

来迎寺は五所神社の北隣りです。『風土記稿』を開くと、来迎寺には三浦義明一族の墓と、宗祖一遍上人の木像ならびに義明の坐像があるとみえます。開山は一向、『鎌倉事典』には開山を音阿としています。

この寺は初め治承四年（一一八〇）三浦の衣笠合戦で戦死した三浦大介義明をとむらうために真言の能蔵寺という寺が子の義村によってここに建てられました。のち三浦氏の滅亡後、応永年中に時宗に改め、音阿をもって中興の開山としました。本尊の阿弥陀三尊は義明の持仏といわれています。



寺三浦義明墓と多々良重春墓

長勝寺

長勝寺は、日蓮に帰依した幕府引付衆の一人石井藤五郎長勝の屋敷跡にたてられた寺です。『鎌倉志』に「石井をもって山号とし長勝をして寺号とした」とあります。寺伝は開山を日蓮上人、石井藤五郎長勝を開基としています。長勝は、当時幕府に使えた引付衆で最明寺入道時頼のとき左衛門尉となった人で、のちに入道して日際となりました。

長勝寺もまた前寺と同じく、日蓮が鎌倉に来て最初に小庵を結んだ由縁の地だとされています。また京都の本圀寺旧地ともいわれています。

貞和元年（一三四五）、京に移った本圀寺の跡に、足利尊氏の叔父に当る日静上人が寺を再興して石井山長勝寺と名づけたと「長勝寺由緒書」にあります。

本尊として宗祖日蓮上人と帝釈天たいしゃくてんを安置します。永享の乱で荒廃した七堂は、小田原北条氏に

よって復興しました。そのとき本堂は、その臣の遠藤因幡守宗為によって建立されました。

またこの長勝寺では、修業僧たちが毎年寒中の氷を割り、その水を頭から浴びて、人々の無病息災をお祈りする荒行が行なわれます。

古老の話によると、明治のころ横須賀線が通るまでは、寺域は安国論寺の山すそまでであったそうです。またその山すそを旧道が東に走って、まんだら堂の切通しから逗子にぬけました。

彫刻家高村光雲作の日蓮上人の銅像が立っています。

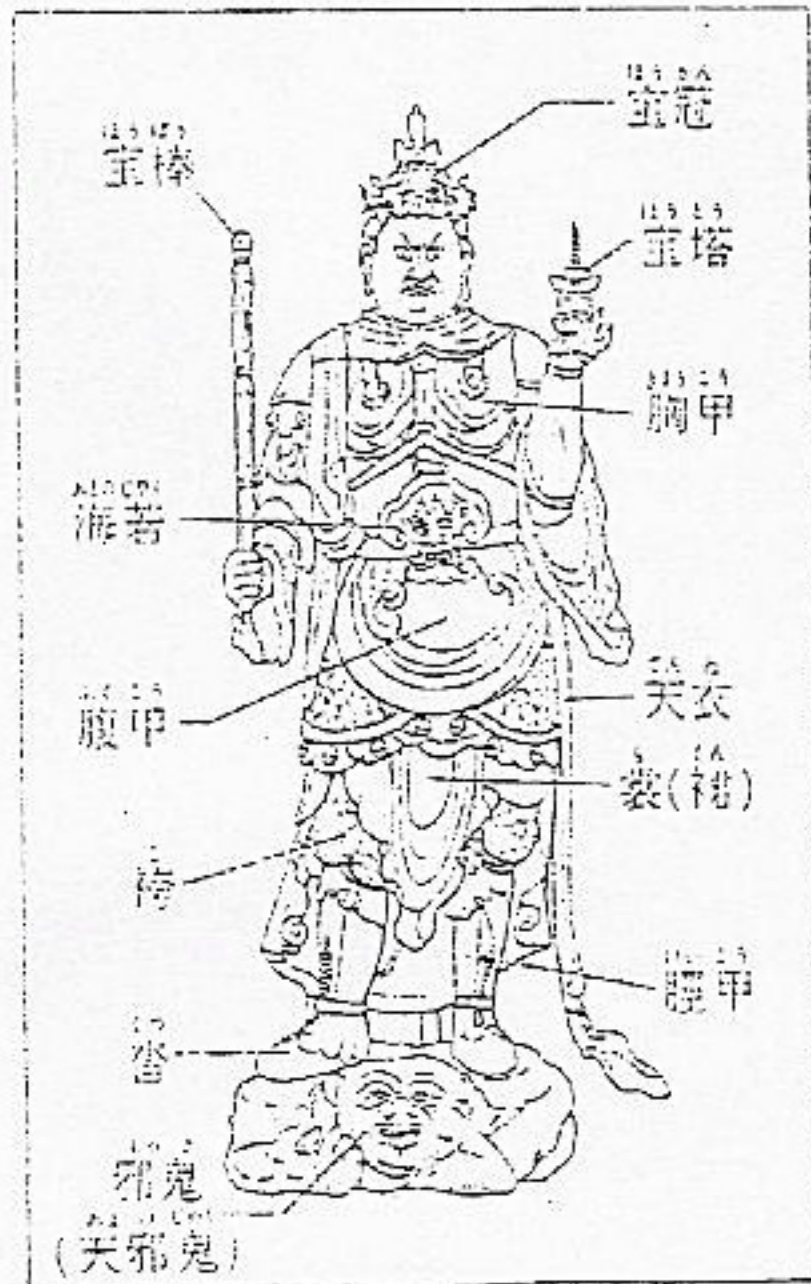


持国天像 (東大寺戒壇院, 奈良県) 天平時代, 鑿造

增長天像 (同左)



広目天像 (同上)



多聞天像 毘沙門天像

妙法寺から額田病院の前をすぎると妙法山立正安国論寺に出ます。寺伝には、松葉ヶ谷小庵の跡と伝えてあります。

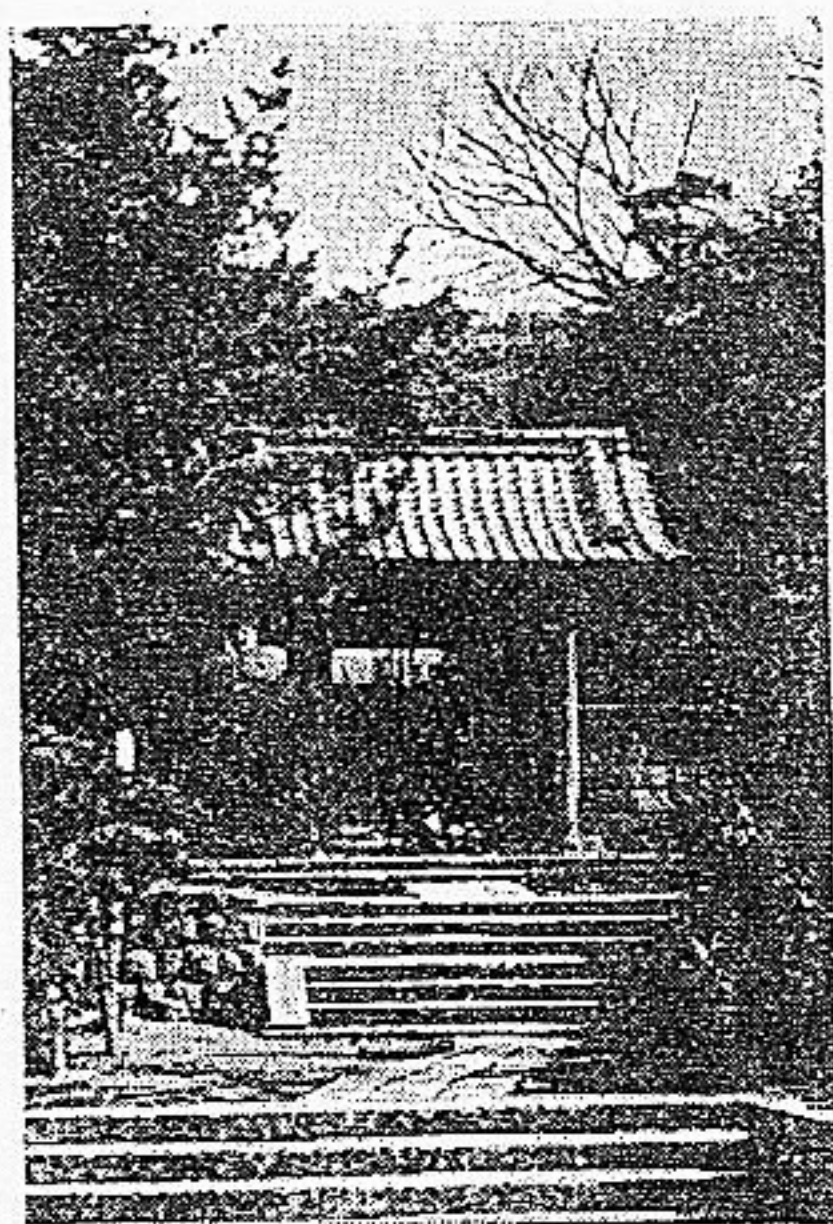
当時の日本は、天変地変が相ついで起きて庶民大衆の生活は、とみに痛めつけられていました。風水害、疫病、地震、かんばつなどがつづいて飢餓地獄の中に庶民は生きる希望も絶たれていました。それを見る日蓮には、心の安まる日はありませんでした。

こうしたなかで、日蓮は新しい仏教観を立てました。日蓮は昼は小町・米町の辻などに法華開教のデモンストレーションを行い、夜はわずかに雨露をしのぐこの小庵に坐って『立正安国論』の草案を練りました。日蓮のこうした新しい宗旨開教には多くの迫害も生じました。夜討ち、暗討ち、そして焼討ちです。これに日蓮は絶対的な無抵抗をつらぬきました。

日蓮は仏祖にかわって、「法華経の行者」つま

り愛の行者としてその至誠を拓して執筆したのが『立正安国論』でした。日蓮は、その一巻が成ると、ただちに時の執権北条時頼にそれを献じました。やがて頑迷な幕府は、日蓮をもっとも危険思想の持ち主として佐渡ヶ島に流謫し、この小庵は焼かれました。いま、日蓮の弟子の日朗が写したという『立正安国論』の一巻が寺宝として残されています。

赤とんぼ硯の水も無かりけり 高木蒼梧



安国論寺

妙法寺

妙法寺は松葉ヶ谷三ヶ寺の一つです。この地は建長五年（一二五三）の夏、宗祖日蓮が安房から渡って来て、はじめて小庵をいとなんだところです。いわば日蓮宗の最初の「精舎」でした。日蓮はここを基地として盛んに開宗説法を行います。

また、この妙法寺を別に苔寺こけでらといっています。本堂の三宝祖師を拝し、近世の名画板戸を拝観して敷石を踏みますと、樹間を渡って肌にしむ風は苔の香をのせて、建武南北時代の哀れさを思い浮かべさせます。美しい庭の苔をさけて歩むと古びた仁王門があります。

そこから法華堂御廟にのぼる石段きだはしは、苔におおわれています。その美しい苔を踏まぬようにわき道をのぼり御堂にお参りし、さらに頂きにのぼると護良親王と御母南ノ方の、また法親王の墓があります。

大宝寺からもとの道を引き返してすぐ左折してしばらく行くと左奥ひだりに妙法寺（日蓮宗）がある。日蓮が1253（建長5）年に開いた松葉ヶ谷まつばの草庵の跡と伝え、日蓮が鎌倉で法華経を広める拠点としたこの草庵は日蓮に反感をもっていた鎌倉の僧侶や武士たちによって1260（文応元）年に焼き打ちされた。日蓮がこの草庵の跡に法華堂を建てたといわれ、これが本国寺ほんこくじで、日蓮宗最初の寺院といわれている。しかし本国寺が室町初期の1345（興国6）年に京都に移建したため、本国寺の旧地が荒廃し、その跡に護良親王の遺子日叡にちゑいが1357（正平12）年に寺院を再興し、これが妙法寺の起こりといわれている。寺号は日叡の房号の妙法房からといわれる。江戸後期熊本の大名細川家が建てた本堂には祖師日蓮像をはじめ仏像が安置され、天井・らん間の絵や彫刻はみごとだ。本堂の右側の奥には仁王門があり、法華堂・釈迦堂跡に上る石段は苔の石段と呼ばれ、一面の緑の苔におおわれて美しい。境内の裏山の奥には、日蓮上人・護良親王・日叡上人らの墓塔がある。

安養院

別願寺の東隣りが、花の寺の安養院です。山号を祇園山長楽寺といっています。

安養院は、北条政子が頼朝の菩提をとむらうために、もと笹目ヶ谷に建てました。開山は大山の不動尊を鑄った憲静願行かんぎょうです。はじめ律宗の寺で長楽寺といいましたが、新田義貞が元弘三年（一一三三）鎌倉に討ち入ったとき焼かれて方八町を寺域とした七堂伽藍を失ないました。のち、唐の高僧で浄土五祖の一人、善導和上の像を安置してあった善導寺あとに移って政子の法号にちなんで安養院と寺号を改めました。

以来安養院は浄土宗名越派の本山として栄えましたが、延宝四年（一六七六）の六月、徳川幕府の諸宗寺院本末改めによって京都知恩院の末寺となります。戦後、浄土宗は従来の本末制度を解体して、いまは浄土宗神奈川教区に属します。本尊は阿弥陀如来。

堂内安置の千手観音は、もと比企ヶ谷にあった

白花山普明院の観音堂が延宝八年（一六八〇）に焼けたため、その観音をここに移したもので、別称田代観音といっています。で安養院を坂東観音霊場第三番の札所とします。また門前の地蔵を「日限地蔵」といって南北朝時代のものです。



安養院宝篋印塔

地蔵堂には日限地蔵ひりんじぞうとか子安地蔵と呼ばれている石像の地蔵菩薩像があり、本堂の裏手には「徳治3（1308）年」の銘がある大きな宝篋印塔（国重文）と政子の供養塔と呼ばれる小さな宝篋印塔が立っている。

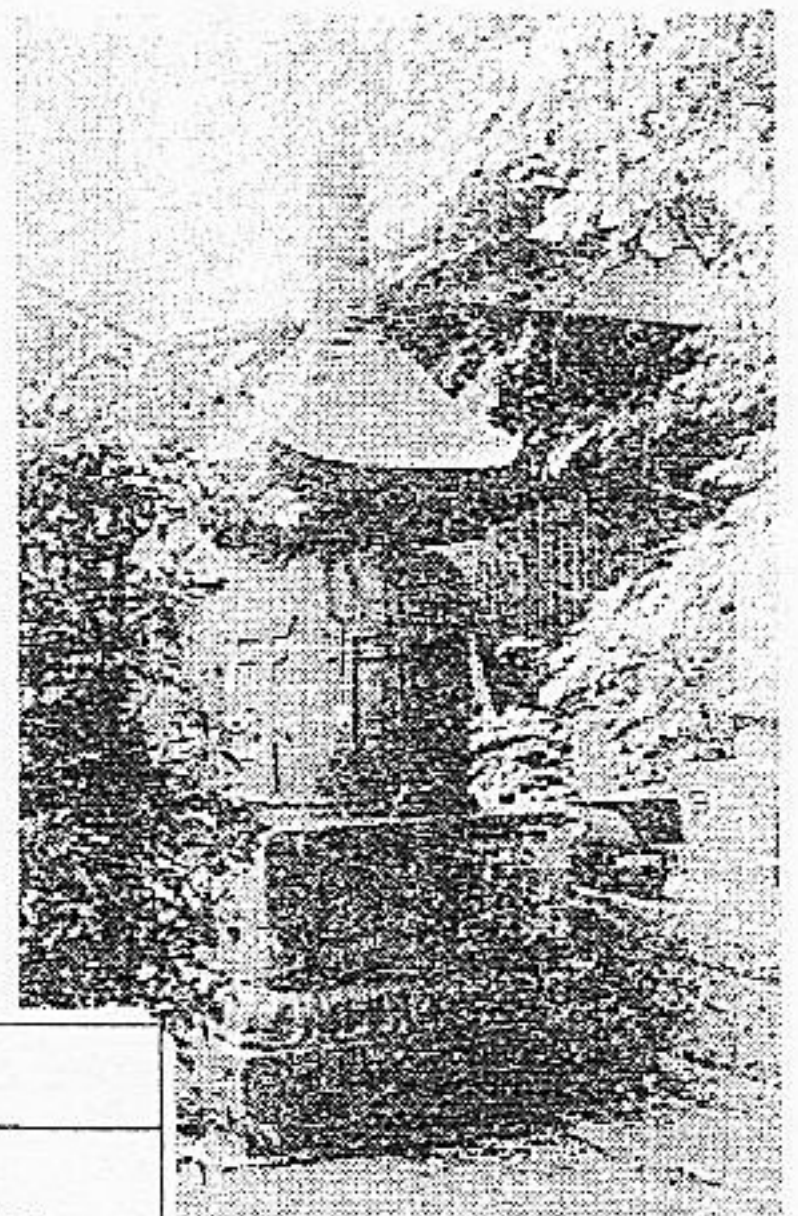
別願寺

別願寺は、教恩寺と同じく時宗の寺です。古くは鎌倉公方家の足利基氏・氏満・満兼と三代の菩提所として栄えました。

この寺はもと真言宗で能成寺といつて、敷地はいまの八雲神社の隣りまであったが、弘安五年（一二八二）一遍上人が鎌倉に遊行されたとき、

この寺の住職の公忍が上人の弟子となって改宗して名を覚阿とあらため、寺号を別願寺としました。境内に入ると、右手に足利持氏の墓と伝える高さ三桁余の宝塔が立っています。塔身の四面に鳥居が彫られた珍しいものです。

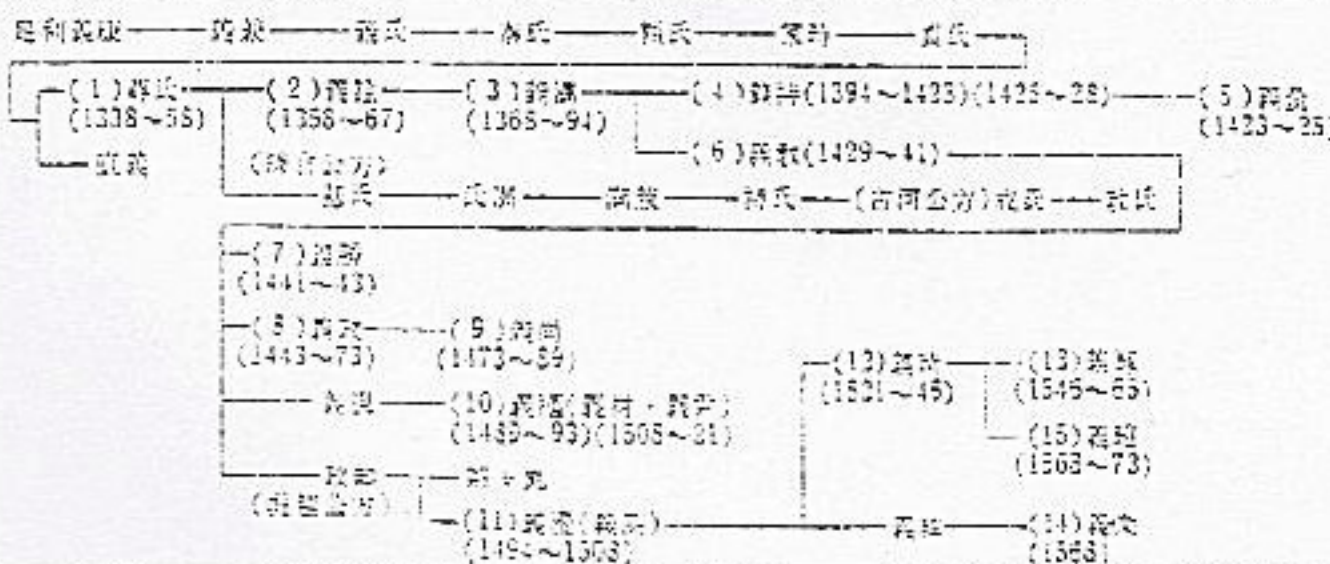
持氏は、初代公方基氏の玄孫で幼名を幸王丸といいました。十三歳で父満兼の死によって公方家を継ぎましたが、六代將軍義教のとき、執事の上杉憲実によって永享十一年（一四三九）二月、叔父満直と共に討たれました。長男の義久は、宅間ヶ谷の報国寺に追われて自刃しました。



足利持氏墓（別願寺）

足利氏

数字は室町幕府の任官の順序及び在任年数



八雲神社

八雲神社のことを町の人たちは「祇園さん」

「佐竹天王さん」などと愛称をもって呼んでいま

す。古老の話では神社は、御府内三社の一つで、

松殿の祇園さん、甘縄の神明さん、坂ノ下の権五

郎さんと呼ぶといひます。

八雲神社は明治初年までは「祇園天王社」とい

いました。むかし源義家の弟に新羅三郎義光とい

うしなう笹の名人がいました。義光が後三年の役のため

奥州に下る途中鎌倉に悪い病がはやっているのを

みて、京都の祇園さまをここに勧請したのだとい

います。

祇園さま（牛頭天王）は、元はインドの祇園精

舎の守護神で除疫の神でした。貞観十八年（八七

六）に藤原基経が自邸に牛頭天王を祀り、祇園精

舎にちなんで祇園神社とよびました。いまは、御

祭神に須佐之男命と出雲系の神々が祀られていま

す。

◎参考書

鎌倉の散歩みち

富岡睦草 83・1 山と溪谷社

鎌倉歴史文学散歩

小沢 彰 H4・12 有峰書房新社

鎌倉物語

小丸俊雄 81・1 ぎょうせい

鎌倉武士物語

今野信雄 91・5 河出書房新社

知られざる鎌倉

沢 寿郎 H3・10 鎌倉朝日

つわものの証

永井路子 S53・9 文芸春秋

相模のものふたち

永井路子 S61・9 有隣堂

武蔵の武士団

安田元久 S61・8 有隣堂

神奈川県歴史散歩

90・10 山川出版社

交通公社のポケットガイド

鎌倉 S60・1 日本交通公社出版事業

歴史と旅 特集 鎌倉の史話50選

S59・4 秋田書店

歴史散歩専典 85・8 山川出版社

日本史年表 児玉幸多編 87・4 吉川弘文館

夷堂橋

小町の南端にある本覚寺の門前の滑川に架かる。小町通りの銚子神社の前身は夷堂で、明治初年の神仏分離前までは、この橋近くにあった。幕府の鬼門除けに頼朝が祀ったといひ、佐渡から帰った日蓮が、身延に立つまでの一時、この夷堂に逗留したと伝える。滑川もこの辺りは夷堂川と呼ぶ。

逆川橋 大町四ツ角からわずか南の道川に架かる。川の名は名越谷から南流の川が、途中、海とは逆な西北方へ曲折するのでついた。

乱橋 (橋)

材木匠の向福寺門前からわずか南よりにある。一辺ばかりの弓型の欄干をそなえた小石橋で、石橋が立つが、橋の感じがしない。元弘三年(一一三三)五月の鎌倉攻めで、市街と海岸線に布陣した新田軍を、若宮幕府(若宮大路東側)と、小町の北条屋敷(三波寺の位置)に寄せつけまいと死力を尽す北条軍が、防壁に耐えず、ついに態勢を崩し、「乱れ」たのがこの辺りと伝える。

日蓮の水

横須賀線の線路に沿った細道を南進して二百ほどばかり、旧名越切通しにかかる旧道の路傍に湧き出る井戸水をいう。銚子の井から至近距離にある。建長五年(一一五三)四月、三十一歳の日蓮は京から安房國小湊の清澄寺に帰り、法華経を唱えるが、既成宗派に嫌われて小湊を逐われ、かつての修行地鎌倉にきて、初めて掘った井戸と伝える。一説に日蓮が旅の渴きに杖を突き刺すと、水が湧き出たと、また日蓮が巨人に水道を致して掘らせたともいう。旱天の年でも涸れることなく、少量ながら今でも冷水が湧き出ている。昔は片瀬菟口寺の注進会やお金式には、貰い水にくる信者多かつた。

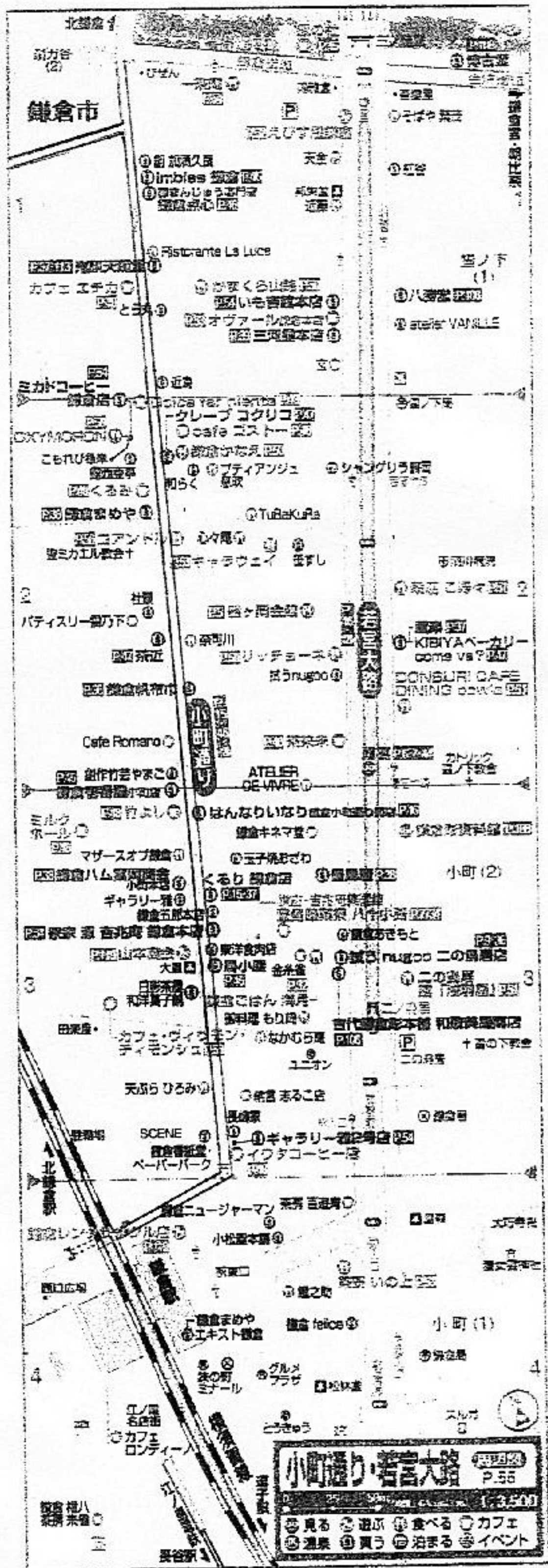
銚子の井 (石の井) 名越踏切を越えて百余い先の名越街道東側の人家の間にある。井戸側は六角の石造りで、蓋も六角の笠形、厚さ十三センチばかりの重厚な石造りである。



鎌倉十橋・十井・五の

鎌倉時代 - 略年表

1063	(康平 6)	源頼義	鎌倉に八幡宮 (<u>元八幡</u>) をつくる
1147	(久安 3)	源頼朝	生まれる
1180	(治承 4)	源頼朝	挙兵、鎌倉へ入る 八幡宮を現在の地へうつす
1181	(養和 1)	文覚、開基・源頼朝により	<u>補陀落寺</u> をつくる
1184	(元暦 1)	源頼朝	大河土御厨を伊勢神宮に寄進
1185	(文治 1)	平家	滅ぶ
1192	(建久 3)	源頼朝	征夷大將軍に。鎌倉幕府開く
1199	(正治 1)	源頼朝	死す
1203	(建仁 3)	比企氏	滅ぶ
1204	(元久 1)	源頼家	死す
1222	頃 (貞応 1 頃)	正宗	生まれる
1232	(貞永 1)	往阿	<u>和歌江島</u> を築く
1243	(寛元 1)	良忠上人を開山とし北条経時、	<u>光明寺</u> をつくる
1245	(建長 1)	越谷・建長	板碑
1252	(建長 4)	日蓮	鎌倉に入る 松葉ヶ谷の草庵をきずく
1253	(建長 5)	惟覺	万葉集校訂を後嵯峨上皇に献上
1260	(文治 12)	日蓮	立正安國論を啓く
1268	(文永 5)	日蓮	龍の口の法難
1282	(弘安 5)	<u>別願寺</u>	できる 日蓮 死す
1320	(元亨 2)	<u>六角寺</u>	現在地へ移る
1333	(元弘 3)	新田義貞	鎌倉を築く
1333	(建武 3)	新田義貞	<u>九品寺</u> をたてる
1345	(貞和 1)	<u>長勝寺</u>	再興 <u>本興寺</u> たてられる
1354	(文和 3)	越谷・東方・六字名号	板碑
1367	(貞治 6)	越谷・大道・七字題目	板碑
1399	(応永 6)	佐竹上総介	<u>大宝寺</u> をつくる
1439	(永享 1 1)	足利持氏	討たれる
1607	(慶長 1 2)	<u>常栄寺</u> (<u>ぼたもち寺</u>)	たてらる
1615	(元和 1)	<u>妙長寺</u>	現在地へ移る
1680	(延宝 8)	旧代観音	を安養院へ移す



小町通り・若宮大路 P.55

1:35:00

①見る ②遊ぶ ③食べる ④カフェ
 ⑤温泉 ⑥買う ⑦泊まる ⑧イベント

皆さまのお気持ちを被災者の方へ お届けさせていただきました。

3月11日の東日本大震災の被災者への、当会の皆さまのお気持ちのこもった義援金を、福島県から越谷市へ避難されておられます方々へ、お届けさせていただきました。

避難されています方々は当初、くすのき荘で集団生活を行なっておられました。今は市内の個人宅やアパートなどへ別れて、お暮らしをされておられます。

一步会という団体（新妻敏夫会長）を作られ、お互いに励ましあっておられます。お届けさせていただきました時に、新妻会長は「私たちも、いまは越谷市民です」とおっしゃっており、この越谷を第二の故郷としたいという、有難いお気持ちを察することができました。本当にうれしいお言葉でした。

一步会の皆さまとも、今後、なんらかのかたちで交流をさせていただきたいとも思っておりますが、とりあえず、義援金持参のご報告をさせていただきます。

義援金は同会の活動資金に使われます。皆さまの温かいお気持ちにお礼を申し上げます。

講演会のお知らせ、二つ 写楽と斉藤豊作について

1. 東洲齋写楽についての講演会

先日のNHKスペシャルで、これまで「本人が誰か」分からなかった写楽について、斉藤十郎兵衛（阿波藩のお抱え能楽者）であるという説が展開されました。この十郎兵衛の過去帳をもったお寺が越谷にあります。三野宮の法光寺です。

講演会は8月27日（土）午後1時半から教育委員会主催・当会共催で中央市民会館で行なわれます。ご講演は千葉市美術館・田辺昌子さん。事前申込みの先着順。

2. 斉藤豊作についての講演会

越谷で生まれ、パリで芸術の花を開かせた斉藤豊作の作品展が9月28日（木）から10月10日（月・祭）まで、南越谷コミュニティセンターで開催されます。プレトークの講演会「画家・斉藤豊作＝越谷からパリへ＝」は9月3日（土）14時～16時、コミセン・4階桐の間で、当会・高崎力常任顧問のお話。ギャラリートーク「フランス風景と斉藤豊作」は10月9日（日）の11時と14時に展覧会会場内で当会会員・竹村克男氏のお話。入場無料。先着順。事前申込み不要。